

自我体験：自己意識発達研究の新たな地平

渡辺 恒夫

(東邦大学理学部)

小松 栄一

(早稲田大学大学院文学研究科)

自我体験の知られざる全体像を解明することが、本研究の目的である。まず自我体験を、「自己の自明性への違和・懐疑」と仮に定義した。この定義に関わりのあると思われる19の質問項目を選定し、質問紙調査を大学生345名(男性102名, 女性243名)に実施した。質問紙では各項目の体験の有無について2件法で回答させると共に、最も早くから体験した項目と、その体験が最も印象に残っている項目について、自由記述を求めた。自由記述内容は仮定義に基づいて自我体験と見なしうるか否か判定され、140の自我体験事例が抽出された。因子分析の結果と事例の検討を併せることにより、自我体験の4つの下位側面が識別され、「自己の根拠への問い」「自己の独一性の自覚」「主我と客我の分離」「独我論的懐疑」と名付けられ、それぞれの特徴が考察された。また、事例内容の詳細な分析により、4つの下位側面の間の関係が示唆された。また本研究では、自我体験の初発時期は児童期にほぼ集中するという結果が得られ、この体験が従来想定されていたような思春期に特有の現象ではないことが明らかになった。

【キー・ワード】自我体験, 自己, 質問紙法, 大学生, 児童期

問 題

自己意識発達論には、James (1895) の自己意識論を踏まえ、Mead (1934) らの社会心理学的アプローチを背景として自己概念発達研究へと発展してきた流れと、Freud (1923) に発する精神分析的な自我発達論の2つの流れがある。後者の流れから派生したアイデンティティ論 (Erikson, 1959) も、盛んな研究対象になっている。ところがこの2つの流れの他にも、一般社会や文学の世界では「自我に目覚める頃」といった表現で親しまれていながら、発達研究の現場では殆ど姿を消してしまった観のある「青年期における自我の発見・目覚め」という問題領域のあることを忘れてはならない。本稿はこの問題領域の中で、自我の発見という現象をその体験的な相において捉えていると思われる Bühler (1926)、Spranger (1932) らの自我体験 (Ich-Erlebnis) を取り上げ、質問紙法調査によってその知られざる全体像を解明し、自己意識発達論にとって新たな地平を拓く可能性と意義とを明らかにすることを目指すものである。

次に本稿の基本構想を定めるため、先行の諸研究を検討する。Bühler (1926) は自我体験を、「思春期に起こる自我の構造的変化の突然の意識化」「自我を突如その孤立性と局限性に置いて経験すること」と定義し、次の事例を典型例として挙げる(本稿ではこの例を「ルディ・デリウス事例」としてしばしば言及する)。

夏の盛りであった。私はおよそ12歳になっていた。

私は非常に早くめざめた。……私は起き上がり、ふり向いて膝をついたまま外の樹々の葉を見た。この瞬間に私は自我体験 (Ich-Erlebnis) をした。すべてが私から離れ去り、私は突然孤立したように感じた。妙な浮んでいるような感じであった。そして同時に自分自身に対する不思議な問いが生じた。お前はルディ・デリウスか、お前は友達がそう呼んでいるのと同じ人間か、学校で特定の名前で呼ばれ特定の評価を受けているその同じ人間なのか。—お前はそれと同一人物か。私の中の第二の私が、この別の私(ここでは全く客観的に名前として働いている)と対峙した。それは、今まで無意識的にそれと一体をなして生きてきた私の周囲の世界からのほとんど肉体的な分離のごときのものであった。私は突然自分を個体として、取り出されたものとして感じた。私はそのとき、何か永遠に意味深いことが私の内部に起こったのをぼんやり予感した。(Bühler, 1926, 原田訳, 1969, p. 92. なお、原文を参照して訳文を変更したところがある。)

この例で見ると自我体験とは、自我の発見の、啓示的非日常的ともいふべき極限的な体験的表現であるといえよう。すなわち、唐突に訪れる、普段の生活とは連続しない体験であって、孤独の自覚と周囲からの隔絶感を伴って、(名前や心身の特徴といった) 具体的経験的な自己像・自己概念に基づく自己理解への、違和や疑問が表明されているのである。この事例は、自我の発見を「個性化の形而上学的根本体験」とする Spranger (1932)

によっても論じられているが、その後は組織的な研究が進展せずに終わってしまった。渡辺 (1995 a) はその理由として、自我体験の研究には方法論上と概念規定上の2つの困難があると述べる。James (1895) の自己意識論では自己は主我と客我に分けられ、主我が哲学に委ねられる一方、自己の客体的側面である客我のみが経験科学としての心理学の対象とされた。現在盛んな自己概念研究はこの流れを汲む。自我体験研究は、主我への気づきを「体験」として研究する道を拓いたといえるが(「ルディ・デリウス事例」に2つの「私」が出現しているのは、客我主我双方への気づきという体験事態を示唆していると思われる)、見ることができ、「体験」であるため組織的研究が困難で、臨床事例報告の中に散発的に現れるに限られたのだった。以上が方法論上の困難であるが、概念規定上の問題として渡辺の指摘するのは、Bühler, Sprangerら創成期の青年心理学の暗黙の歴史哲学的背景である。すなわち、青年期における自我の発見という自己意識発達上の不連続点は、Heckelの、個体発生は系統発生を反復するという説の暗黙の影響下に、思想史・哲学史から持ち込まれたものと思われるのに、その源泉に遡るなどの理論的な作業は試みられなかった。そのため、古典的ドイツ青年心理学の影響の衰微と共に、背景の異なるEriksonの「青年期におけるアイデンティティ危機/混乱」の枠組の中で一般化され、独自の研究領域として主題化されることはなかった。渡辺は、概念規定を明確にするためにはまず、思想上の「自我の自覚」の例を検討する必要があるとする。

このような困難にもかかわらず、近年、日本では組織的な研究への芽が萌している。西村 (1978) は、臨床心理学の立場からルディ・デリウス事例に他の自伝的事例を加え、「自我体験は基本的には自分が自分であるという、内なる自己との出会いの体験」であり、「一種の啓示的体験」であり「外界との隔絶を生じ、孤立感を伴うこともある」と、主要な特徴を指摘しつつ、離人体験や宗教体験との近縁性にも言及している。また、「エリクソンの心理学において自我同一性が重視されているが、それは自我体験そのものとしてではなく、役割行動をとり得る可能性の重要な基礎として問題にされているのである」と、アイデンティティ論との差異を指摘している。

高石 (1989) は、自我体験は特別な体験というより、誰にでも起こりうるという仮定に基づき、組織的な調査を行った。まず、西村の考察を踏まえ、自我体験の下位概念として(1) 孤独性 (自我を外界から分離・隔絶されたものとして感じる)、(2) 独自性 (自我を単一・独自の有限な個体として認識すること)、(3) 自我意識 (自我の对象的把握あるいは自我と自己の分離の意識)、(4) 自律性 (内的権威の発見とその重視)、(5) 変化の意識

(過去との断絶感及び未来への展望)、(6) 空想傾向 (内界への集中的関心と、一人で空想に耽ることへの嗜好)、(7) 自然体験 (自己の気分の外界への投影として、自然を幸福と美として意識すること)、を抽出して34項目からなる「自我体験尺度」を作成した。女子中高生622名に施行した結果は、殆どが何らかの部分体験を想起し、また最初の体験は10歳頃の年齢に生じたと答えた者が最も多かった。しかしながら想起例の分析が余りなされていない上、「空想傾向」「自然体験」の質問項目に自我体験というには周辺的と思われるものも見受けられ、概念規定上に問題を残した。

渡辺 (1992) は、James (1895) の自己意識論に基づき、主我・客我の分裂と両者の同時的意識化が自我体験の根源にあるとする立場から、男女大学生227名に質問紙調査を行った。すなわち自己の起源に関する4つの文章を体験の見本例として提示し、最初に生じた類似の体験を自由記述させ、年齢、きっかけ、解決法の記述も求めた。結果のうち、記述内容を検討し、45例を自我体験例として判定し、1) なぜ自分は自分なのか、2) なぜ自分は他の人間ではないのか、3) なぜ、今、ここにいるのか、4) その他のやや漠然とした問いかけ、という4タイプに分類した。また渡辺 (1995 b) は類似の方法で大学生の両親にも調査を行い、その結果を、自我体験は青年期に特有なものではなく、児童期前半から青年期にかけての広い期間に見いだされ、さらには結婚出産がきっかけという例もあることから、生涯にわたり人生の転機や葛藤をきっかけとしてくり返し生ずる、とまとめた。しかしながら渡辺の用いた質問紙は体験の見本例としては少なすぎて特定のタイプに偏りすぎ、いかに見本例項目をそろえるかという方法論上の問題と共に、そのための概念規定の必要性という問題をも残した。

天谷 (1996) は、25の項目の見本例からなる質問紙調査を男女大学生160名に実施し、自我体験と見なせる自由記述を報告した50名中、22名に半構造化面接を行った。また、自我体験を「視点が主我・客我2つの存在に分化し、(主我が)自分という存在に対して問いかけたり、強烈に意識したりする体験全体」と定義してチェックシートを作成し、2名の判定者によって面接記録を判定し、17名に自我体験を認めた。また下位側面を、I 自分というものへの問いかけ (1 自分自身の本質的な実在への探索・疑問、2 自分のものであると同定しているもの(名前・体)への違和感・疑問、3 自分の起源・場所への疑問)、II 「自分」というものへの意識・自分なりの確立 (1 独自性、2 自分の本質的実在の実感、3 自分と周囲の関係性への意味付け、4 自分の人間性についての一貫性、5 自律性) とあらかじめ分けて記録を分類した結果は、自我体験には下位側面Iが主として見られ、下位側面IIはIの結果見られる場合がある、と位置づけら

れた。初発年齢は8-12歳が多かった。次いで天谷(1997)は、中学生18名に半構造化面接を行い、質問紙調査によるスクリーニングを経なかったにもかかわらず殆ど全てに自我体験を見いだした。体験年齢、内容とも、中学生と大学生ではほぼ同様であった。

以上の諸研究を批判的に参照しつつ、本研究を以下の方針で進めることとする。

1) 自我体験を、「それまで自明であった具体的経験的な自己概念に基づく自己理解への違和・懐疑にかかわる体験であって、自己についての様々な思索や感情を伴うこともある」と仮に定義する。ここでキーワードとなっている「それまで自明であった具体的……自己理解への違和・懐疑」(以下、「自己の自明性への違和・懐疑」と略記する)は、事例ルディ・デリウスをはじめとしてこれまでの研究において暗黙裡に自我体験例の中核となっていた要素を明示化したものである。2) 青年心理学でいう「自我の発見」とは元々思想史から持ち込まれたという渡辺(1995 a)の示唆を生かすと、思想史を参照せずして自我の発見の心理学研究を行うのは、物理学の初歩を知らずに子どもの速度概念の心理学研究を行うようなものだという事になる。よって、思想史上の「自我の発見・自覚」例の主要原典を参考にして仮定義にかかわりのあると思われる十数個の質問項目を仮に選定し、予備調査を行った上で、本調査の質問紙を作成する。3) 本調査を実施する。4) 質問項目の因子分析により自我体験を分類する。5) 自由記述例を複数の判定者

によって判定し、自我体験例を抽出する。6) 自我体験例の考察を通じてその全体像を明らかにし、自己意識発達上に位置づけるべく努める。

方 法

質問紙の作成 思想史上の「自我の発見」の例としてよく知られているデカルト、パスカル、ウパニシャッドの原典から、自我をめぐる思索の3つの基本的な類型を取り出し、自我体験分類の作業仮説とした(以下、それぞれD類型、P類型、U類型と名付ける)。原典中の核心的部分をTable 1下段に引用する。これらを基本的と見なすのは、これら原典がインド文明圏と近代西欧文明圏の精神史的な形成期において自己意識をめぐる諸問題を根源的に論じ、東洋的叡知と西欧キリスト教思想、科学的合理主義と神秘的宗教思想、実存的苦悩と理知的内省などの区分軸によって相互に対比できるものになっているからである。事実、これら3類型はそれぞれが、仮定義のキーワード「自己の自明性への違和・懐疑」を、より論理的に明晰な形で語っていると見なすこともできる(Table 1中段参照)。それゆえ、自我体験が自我の発見の体験面としての名に値するためには、3類型のいずれかを萌芽的・断片的・混乱した形であっても含む筈であるという、規範的意義をこれらに想定することとした。

哲学史上の原典を元に調査項目を作成することには、本稿とはやや違ったテーマと方法論に基づいてはいる

Table 1 自我体験分類の作業仮説

D 類型 デカルトより	P 類型 パスカルより	U 類型 ウパニシャッドより
世界および自己の自明性への懐疑と不安、自覚された自我の独自性、自存性	世界における自己の位置づけの自明性への違和、自我の偶然性、無根拠さ、孤立性	反省的自己意識における自己の自明性の否定、自己の分裂と捉えがたさ、内面性
私は、それまでに私の精神に入りきったすべてのものは、私の夢の幻想と同様に、真ならぬものである、と仮想しようと決心した。しかしながら、そうするとただちに、私は気づいた。私がこのように、すべては偽である、と考えている間も、そう考えている私は、必然的に何もかのでなければならぬ、と。そして「私は考える、ゆえに私はある」Je pense, donc je suis. というこの真理は、懐疑論者のどのような法外な想定によってもゆり動かしえぬほど、堅固な確実なものであることを、私は認めたから、私はこの真理を、私の求めていた哲学の第一原理として、もはや安心して受け入れることができる、と判断した。(野田, 1967)	… 私は、私を閉じこめている宇宙の恐ろしい空間を見る。そして自分がこの広大な広がりの中の一隅につながれているのを見るが、なぜほかの処でなく、この処に置かれているか、また私が生きるべく与えられたこのわずかな時が、なぜ私よりも前にあった永遠と私よりも後に来る永遠の中のほかの点でなく、この点に割り当てられたのであるかということを知らない。私はあらゆる方面に無限しか見ない。…私の知っていることのすべては、私がやがて死ななければならないということであり、しかもこのどうしても避けることのできない死こそ、私の最も知らないことなのである。(前田, 1966)	貴公は見るという作らきの[主体たる]見者(みて)を見ることはできません。貴公は聞くという作らきの[主体たる]聞者(ききて)を聴くことはできません。貴公は意うという作らきの[主体たる]意者(おもいて)を意うことはできません。貴公は識るという作らきの[主体たる]識者(しりて)を識ることはできません。しかし、これ[の主体]こそ貴公に存する万有内在の自我(アトマン)なのです。これ以外の物はすべて種種の苦患に満ちているのです。(佐保田, 1976)

が、Subbotsky (1996) の例がある。本稿では、各類型にはほぼ均等に配置されるように、まず16の自我体験質問項目を仮選定した。その際、高石 (1989) の自我体験尺度の項目の一部、ならびに渡辺 (1992) の調査の自由記述例を表現上の参考にした。この16項目により、理科系T大学および文科系A大学の学生277名(男子41名、女子236名)を対象に予備調査を実施し、誘発された自由記述の内容を検討したところ、2類型ないし3類型の混成と思われる記述例が多数見られた。このため、予備調査で得られた記述例を参考に多義的な項目を分割するなどして項目を選定し直し、最終的に19項目からなる質問紙を作成した。各項目には「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。また、自我体験項目で1つでも「はい」と回答した者を対象に、「はい」と答えた項目のうちで最も早くから考えたり体験したりした項目(初発体験項目)、ならびに、その考えや体験が最も印象に残っている項目(最印象体験項目)について、それぞれ、a. 最初に起こった年齢(「小学校入学以前」「小学校低学年」「小学校中学年」「小学校高学年」「中学」「高校」「高校卒業以降の数年」より選択)、b. きっかけ、状況、具体的な内容、その後どうなったか、についての自由記述を求めた。

対象者 理科系T大学、文科系A大学、および総合E大学の学生345名(男子102名、女子243名)。1996年10月から12月、教養心理学の授業中に実施した。

結 果

因子分析による項目の分類、ならびに自由記述で報告された自我体験の判定、の2つをあわせて結果を整理していくことにする。

質問項目の因子分析

自我体験の下位分類に関する仮説の妥当性を検討するため、欠損値のあるデータを除いた333名のデータについて因子分析を行った。「はい」「いいえ」回答の間の質的な連続性を仮定した2値データであるので、各項目間の四分相関係数を算出し、これに基づいた因子分析(主因子法バリマックス回転)による分類を試みた。スクリー基準により3因子、固有値1以上の基準により5因子が抽出されたが、解釈上最も妥当と思われる4因子を採用した。回転後の各項目の因子負荷量をTable 2に示した。抽出された因子はそれぞれ、因子1「自己の根拠への問い」、因子2「自己の独一性の自覚」、因子3「自我と客我の分離」、因子4「独我論的懐疑」と解釈可能であり、このうち、因子2はD類型と、因子3はU類型とほぼ対応した。因子1はD・P・Uの3類型に共通する因子であり、因子4はD類型とP類型の混成である。ちなみに、因子分析の結果を通して思想上の自我の自覚例を見直すと、3類型がそのまま別々の因子に対応する

のではなく、共通の因子として「自己の根拠への問い」が抽出され、しかもパスカルの思索(P類型)が共通因子に最も近く位置することになる。また因子4はデカルトとパスカルに感じとられる孤立と不安の要素が分凝したものと解され、東洋的自我には見られない近代的自我の特色をなすものと見ることができよう。

自我体験の判定

自由記述中で報告された事例について2名の判定者(著者)により自我体験と見なしうるかどうかを判定した。判定にあたっては、予備調査の自由記述例を参考に、5項目からなるチェックシートを作成した。これらの特徴はいずれも、典型的な自我体験の例として取り上げた「ルディ・デリウス事例」にも顕著に認められるものであり、自我体験を判定する基準として十分な識別力をもつものと考えられた。以下に判定基準とその適用例を提示する。なお、基準1は全体の前提条件をなすものであり、2と3は、「ルディ・デリウス事例」に見られる「啓示的非日常的」側面をはじめとする体験としての特徴に、4、5は体験の認識内容に着目するものである。

1 自己が何らかの形で主題となっていること

2 突発性 普段の生活とは連続しない特殊なエピソードとして回顧されていること。具体的には「ふと」「突然」「瞬間」などの表現によって、その体験が生じたときの「唐突さ」や「脈絡のなさ」が記述されていること。たとえば「突然ふとした瞬間に、私は何なのだろうかとか、私もいつかは死ぬんだとか考えることがある」「小さい頃、朝目がさめて、ふと思ってよく考えていた」「静かな部屋でぼおっとしているときにふとそのことが疑問に出てきた」といった事例に適用された。

3 違和感 何か理解しがたいことが生じている、あるいは、その体験が普通ではない、という独特の感じが伴うこと。表現例は「考えれば考えるほど分からなくなった」「不思議な感じ」「怖くなった」「自分を見失いかけた」などである。

4 孤立と隔絶 自分という存在が、全ての他者、さらには世界全体と対置され、自己の孤立性や例外性が強く意識されていること。具体的には「自分一人だけが」「自分以外のものは全て」「他人も自分と同じように～なのだろうか」などの表現を含む事例に適用された。

5 自己の分離 自分という存在が2つに分離して感じられたり考えられたりしていること。表現としては「いつもの自分」「他人が見ている自分」「鏡に映った自分」あるいは「身体」「肉体」などに対して、これらとは異質なものとして「本当の自分」「本体」「魂」などが対置されていること。なお、この基準の適用に際しては、仮定義に基づき、それまでの自己の自明性に対する違和や懐疑が認められるかどうかをチェックした。たとえば「かつてに人にあなたはこういう人でしょうという具合

に決められてしまっていた。その人が知っているのは私の一部分であって全てではない。本当の私を知らないと思った」や「他の人から真面目な人だと思われていたようだが、自分では他人が評価するほど真面目な奴じゃないのと思った」といった事例の場合、自分自身もっている自己概念そのものには疑いの目が向けられていないため、この基準の適用からは除外された。

全回答のうち、チェックシートの基準1を含む2つ以上を満たしていることを判定の目安とした。判定者間の一致率は93.0%であり、判定の異なる28例については協議により判定を一致させた。なお、判定者は、多数の自我体験の報告例に接して、自我体験と見なされる体験の内容について十分に知悉しているものと想定した。これは、熟練した精神科医が真正分裂病を鑑別する際に「プレコックス感」を診断基準として用いるという方法

(Rümke, 1958; 松尾・宮本, 1995) に倣ったもので、対象について知悉している判定者は明示的には記述できないとしてもその現象の特異性を十分に識別することができる、という考え方に基づいている。研究の現段階では、判定基準を完全に明示化するには限界があり、時期尚早でもあると考えての処置である。以上の手続きにより、自我体験と判定された自由記述は、初発体験項目について95例(記述なし88例を含む全回答の27.5%, 男子27例, 女子68例)であり、最印象体験項目について45例(記述なし202例を含む全回答の13.0%, 男子11例, 女子34例)であった。最印象体験で「記述なし」が増えているのは、初発体験項目と最印象体験項目で多くの回答者(142名)が同じ項目を選択したことによる。なお、事例の出現率に性差は認められなかった。各質問項目によって誘発された自我体験の事例数はTable 2に示した。

Table 2 因子分析の結果と質問項目ごとの自我体験事例誘発数

項目	項目の肯定 回答数	初 発 数	事例 数	最印 象 数	事例 数	F1	F2	F3	F4
「自己の根拠への問い」									
19. 自分は本当は存在しないのではないかと、思って不安になったことがある。……D/U	77	6	4	5	3	.84	-.02	.29	.14
18. なぜ私は私なのか、不思議に思ったことがある。……P	185	20	14	16	3	.84	.33	.10	.00
15. 私はなぜ生まれたのか、不思議に思ったことがある。……P	221	44	6	20	2	.82	.01	.10	.14
04. 私はいったいどこから来たのだろうか、考えたことがある。……P	176	12	4	10	3	.72	-.02	-.11	.41
02. 自分はいったい何者なのか分からなくなったことがある。……U	231	11	2	16	2	.71	.09	.40	.17
13. 果てしない時間と空間の中で、なぜ、いま、ここにいるのか?と考えたことがある。…P	233	16	7	13	4	.67	.35	-.03	.27
16. ほんとうの自分とは何か、ということ考えたことがある。……U	280	24	0	52	1	.64	.51	.45	-.14
01. この世界はなぜあるのか、と考えたことがある。……P	218	23	6	19	4	.57	.21	.05	.49
07. いま、夢の中にいるのかもしれないと思って、不安になったことがある。……D	123	20	10	19	5	.51	-.03	.28	.00
17. なぜ、他の国や他の時代に生まれずこの国のこの時代に生まれたのか、不思議に思ったことがある。……P	191	27	6	15	1	.43	.30	-.28	.38
「自己の独一性の自覚」									
11. 生きているというだけで、私にはかけがえのない価値がある、と思ったことがある。…D	185	9	1	15	1	-.01	.76	-.19	.11
06. ある日、ふと、「自分は人間だ」とか、「自分というものが存在している」といったことを、強く感じたことがある。……D	195	6	3	7	0	.28	.71	.17	.32
14. 自分は他の誰でもない自分なのだ、ということ強く感じたことがある。……D	219	7	3	14	1	.12	.69	.21	-.06
05. 宇宙は巨大で人間はちっぽけだが、その巨大な宇宙について考えることのできる人間は偉大である、と思ったことがある。……D/P	81	3	0	5	1	.05	.68	.08	.00
「主我と客我の分離」									
09. 鏡に映る自分とか、人の目に見える自分、人にそう思われている自分といったものは、本当の自分ではない、と思ったことがある。……U	201	28	2	36	7	.03	.07	.70	-.01
03. 私と他人とは島のように切り離されていて、他人のことは決して分からない、と思ったことがある。……P	169	17	0	17	0	.13	.02	.63	.22
10. 自分のことを考えたり観察したりしていると、自分が観察されている自己と観察している自己に分裂して感じられる、と思ったことがある。……U	139	12	5	12	1	.19	.11	.60	.19
「独我論的懐疑」									
12. 他人も自分と同じようにものを考えたり感じたりするのだろうかとか、私だけが本当に生きていて他人はみんな機械のようなものではないかとか、思ったことがある。……D/P	100	28	14	15	3	.11	-.04	.21	.83
08. 私が死ねば世界も消滅するのではないかと、とか、見えない先は無になっているのではないかと、といったことを考えたことがある。……D	99	26	8	18	3	.23	.16	.29	.61
寄与率						35.9	10.5	8.5	6.9

注. 各質問項目の後の記号は分類上の類型を示す。「初発」は初発体験項目の、「最印象」は最印象体験項目の肯定回答数。

自我体験の初発時期

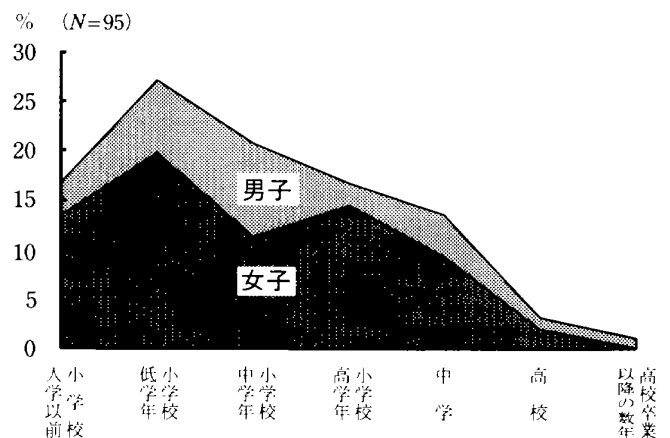
自我体験と判定された初発体験項目の95例について初発時期の分布をFigure 1に示した。小学校低学年に想起された初発体験のピークが見られ、10歳前後に体験時期が集中するという先行諸研究での結果より、さらにいくぶん低年齢の結果となった。これにより、自我体験は決して思春期に特有のものではないこと、むしろ学童期あるいは学童期以前に初発したと回顧されることが確かめられた。

体験の状況ときっかけ

自我体験と判定された事例のうち、体験の生じた状況について明確な記述のある62例を、他者との相互作用の有無により「一人でいるとき」「人のいる場所で」「人と話している」の3つのカテゴリーに分類し、Figure 2に示した。このうち「一人でいるとき」が52%と最も多く、カテゴリーの比には有意差が認められた($\chi^2(2, N=62) = 9.71, p < .01$)。また、体験のきっかけとなった出来事や考えについて言及のある51例を、その内容により「人間関係の葛藤」「死について考えて」「宇宙のことを考えて」「自分を観察して」「他人や生き物を観察して」の5つのカテゴリーに分類し、Figure 3に示した。なお、カテゴリーの比には有意差は認められなかった。これらの結果は、他者との相互作用がない状況で自我体験が生じやすいこと、ただし、体験のきっかけには日常の社会生活上の出来事を含む様々な内容がありうることを示唆している。

事例の分析と考察

自由記述例の分析を通じて、自我体験を構成する4つの側面(「自己の根拠への問い」「自己の独一性の自覚」「主我と客我の分離」「独我論的懐疑」)の特徴と自我体験群の全体像を検討していく。自我体験という現象自体が今日の発達心理学界になじみがないという現状に鑑み、できるだけ多くの事例を紹介し、定性的考察を中心とすることとし、因子分析の結果は事例の分類に利用するにとどめた。なお、全ての事例は自由記述の際に選択



注：2つ以上の時期にまたがる回答については早い方を初発時期とした。

Figure 1 初発体験の時期分布

された項目が属する因子のもとに分類された。因子4は2項目に対して28例、因子1は10項目に対して87例と、期待度数を上回る事例が分類されており、各因子の事例数の比には有意差が認められた($\chi^2(3, N=140) = 29.49, p < .01$)。

1 「自己の根拠への問い」

この下位側面には、初発体験について59例(自我体験と判定された全95例の62.1%)、最印象体験について28例(全45例の62.2%)が含まれる。質問項目ごとの事例数の比には有意差が認められた($\chi^2(9, N=87) = 23.69, p < .01$)。項目18の「なぜ私は私なのか、不思議に思ったことがある」は最多の17例を誘発しており、因子負荷量も大きい上、質問内容も簡潔な表現によって自分という存在の根拠を問うものであり、この項目の表現に「自己の根拠への問い」の特徴が集約されていると考えられる。

まず指摘できることは、この「なぜ私は私なのか」の疑問のなかで同じ「私」という語が2つの異なる意味で使われている点である。一方の「私」は特定の人物を指示する人称代名詞であり、この「私」は固有名に置き換えることができる。これに対し、もう一方の「私」はあ

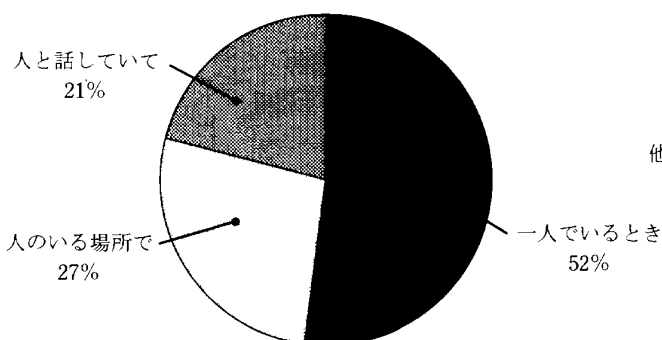


Figure 2 体験の状況

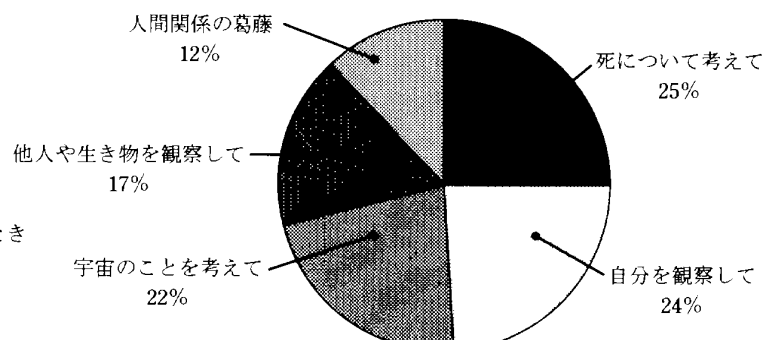


Figure 3 体験のきっかけ

る一人の人間が他の全ての人間とは違って「現に自分として存在している」という事実を意味し、固有名によっては置き換えることができない。本稿の冒頭に引用した「ルディ・デリウス事例」に顕著に認められるのが、この2つの「私」の区別に対する明確な自覚であり、さらに、普段は自明視されている2つの「私」の結合関係（特定の名前で呼ばれ特定の評価を受けている）人物が「私」であること）の根拠に向けられた疑いの念である。用法を異にする「私」の2つの意味が分化し、2つの「私」の結合の根拠に疑いの目が向けられることは、自我体験の第一の下位側面における最も基本的な特徴である。

事例01/21歳/女/初発項目18/高校；「なぜ自分がこのような顔や、性格なのだろうか？と思った。もし私自身は変わらずに、全く違う顔、性格を持っていたらどうなっていたのか？と考えたことがある。考えているうちに不思議な感覚になって、自分の存在すら疑問に思った。」

事例02/19歳/女/初発項目18/中学—高校；「突然ふとした瞬間に、私は何なのだろうかとか、私もいつかは死ぬんだとか考えることがある。また、もしお母さんがお父さんと別の人と結婚したら、また今の私が生まれてきて、魂は同じだけど、顔とかは別の『私』が生まれるのかなあと思ったことがあった。」

これらの事例では、固有名に置き換え可能な「私」とその人物が現に自分であるという意味での「私」とが区別され、他の人物が自分である可能性の想定を通じて、2つの「私」の結合関係の根拠が疑われている。この一見無意味とも思える「なぜ私は私なのか」の問いの有意性をめぐる議論は現代哲学におけるトピックの一つでもある（たとえば、Nagel, 1986；永井, 1986）。

この「なぜ私は私なのか」の問いのなかには「他の人間が私であることもありえたのに」という仮定が前提として含まれている。このため、次に挙げる例のように、他の人間や他の存在に注意を向けることが自我体験的な疑問の契機となる場合がある。

事例03/20歳/女/初発項目18/小学校高学年；「スピーチしている友人をじっと見つめていて、どうしてこの人は〇〇さんなんだろうと思ったとき、どうして自分は自分なんだろう、他の人にも生まれることができたのではないだろうか考えたことがありました。その時は、まばたきもしないで、その友人を見つめていました。その後は、長い間、そのことについて考えていましたが、自分にもどるのが大変でした。（略）」

事例04/20歳/女/初発項目18/小学校入学以前—小学校低学年；「小さい頃、母に植物や虫等にも命があると教えられた時、では、なぜ、私は、雑草でもなく、たんぼぼでもなく、電柱でもなく……私なんだろうか、

と考えた。そのような事を考えた時は、体と心が別々になり、心だけが浮かび上がるような、そんな感じがした。（うまく表現できないが）まるで、自分が人間であってはいけないような気もした。母に、なんとかこの気持ちを伝えたかったが、相手にされず、とりあえず、“そんなことは考えてはいけないこと”と教えられた。」

また、次の例のように「いじめ」という具体的な出来事をきっかけとして「他の人間が自分である可能性」の想定から「なぜ私は私なのか」の問いが出現する事例も見られた。

事例05/21歳/女/初発項目18/小学校低学年；「小学校1～3年の間、いじめを受けていて、『他の子だったら、いじめられないのに』と思ったら、『なぜ私は私なんだろう』とか『なぜ、ここに生まれてしまったんだろう』と考えるようになった。（略）」

次に挙げる事例では「死」をめぐる考えが、自分が存在しない世界についての想像をもたらし、情動的な色彩の強い体験を出現させている。

事例06/20歳/女/初発項目02/小学校低学年；「祖母が亡くなった時、小さいながらも“死”というものを考えた。自分が死んだらどうなるのだろうかと考えているうちに、自分というものがよく分からなくなって、恐くなってよく泣いていた。しばらく、一人になるといつもそういうことを考えて泣いていた。（略）」

さらに「なぜ私は私なのか」の問いは自分自身に問いかけるときにのみ意味をもち、対話の相手のある、役割行動としてのコミュニケーションの文脈のなかでは本来の意味を喪失する。この点が、類似の表現で語られる「私が私自身であること」「私らしさとは何か」などのいわゆるアイデンティティをめぐる問いとの相違である。アイデンティティの危機・混乱の問題は、固有名に置き換え可能な「私」の属性にかかわるもので、人稱を変換して「あなたがあなた自身であること」「彼女の彼女らしさ」と言い換えても本来の意味が損なわれることはない。すでに引用した西村（1978）の言葉を借りるならば、これらの問いでは「私であること」が、「自我体験そのものとしてではなく、役割行動をとり得る可能性の重要な基礎として」の限りにおいて問題にされているのである。これに対して自我体験の問いのなかでは、固有名や他の人稱に置き換え不可能な、「私である」という事実の、唯一性・例外性が驚きをもって問われている。こうした問いが出現するためには、次に挙げる事例のように、一人きりで内言や空想に没入し、対象との相互作用的な接触をもたないという状況が一つの条件として要請される。

事例07/18歳/男/初発項目13/中学；「静かな部屋でぼおっとしているときにふとそのこと[なぜ、いま、ここにいるのか?]が疑問に出てきた。その後も、自分の

頭の中で考えごとをしていると、時にそのことについて考えたりしてみた。しかし、考えても全然分からなかったの、あまり深くは考えなかった。」

この下位側面に属する事例のもう一つの重要な特徴は、独特の気分や感覚、さらに、不安、恐怖、自分を見失うなど、ネガティブな色合いをもった強い情動的体験が伴うことである。また、多くの事例において“いくら考えてもさっぱり分からなかった”と記述されており、情動的体験のネガティブな性質とあいまって、解決を与えられないまま放置されたり忘れられたりするの、この体験のその後の経過の一般的な傾向であると思われる。しかし、体験のなかの問題意識が、自覚的にせよ無自覚的にせよ個人の人生観や世界観に影響を及ぼしている可能性は考えられる。たとえば、自己の独自性・唯一性が強く意識されることで「かけがえのない自分」という積極的・肯定的な自己像が構成され、さらにこれを人間一般に拡張することで他者の存在の尊重や肯定的配慮が生まれることもあるだろう。全く逆に、この体験の本質的に孤独な性質が、自分と自分以外の全ての人間を先鋭に対立させるような世界観に引き継がれ、日常生活態度としての自己中心主義や自閉傾向と結びついたり、場合によっては「病的」と見なされかねない特異な空想体系の形成に寄与している可能性も想定できる。また、2つの「私」の結合の根拠に向けられた疑いが「身体」と「魂」という2つの対立する実体概念に引き継がれ、“死後の魂の存続”や“生まれ変わり”などの「宗教的」な信念体系の形成に寄与することも想定される。このように、自我体験のなかの問いや思いが、ある種の人生観や世界観へと発展していく過程を表していると思われるのが、次に考察する3つの下位側面である。

2 「自己の独自性の自覚」

この下位側面に分類される事例は、初発体験が7例(全事例の7.4%)、最印象体験が3例(6.7%)である。事例数は4つの下位側面のなかで最も少ないが、因子分析では4項目が分類され、10.5%の寄与率をもつ安定した第2因子として抽出された。

事例の特徴は、問いや疑いの形式をとる下位側面1とは異なり、自分という存在の独自性(すなわち独自性・唯一性)や孤立性が厳然たる事実として強く意識されていることである。次の事例には、自分の身体が自分のものであるという普段は自明のこととして了解されている事実、突如、違和が発生する様子が描かれている。

事例08/21歳/女/初発項目06/小学校入学以前-小学校低学年;「自分の声を自分できいて、自分がコントロールできる唯一の人間の姿を鏡でみて変なかんじがした。いつもは私がうつっていてあたりまえすぎて考えなかったけど、私が手を動かそうとすると動かし、声をだすと自分の声のでるし、自分の目を見つめて、他人なよ

うな、自分なような変なかんじがした。(略)」

次に挙げる事例では、他者との社会的な関係を経て、他の人間とは決して交換することのできない一個の存在として自己の独自性が自覚されている。突発的なエピソードではないが、他者との関係のなかで自我を発見し確立していく萌芽が認められる点で、発達過程において重要な意義をもつ体験である。

事例09/一/女/初発項目14/小学校高学年;「小学生のころに徐々に幼いころとちがって人間関係が少し複雑になってきたとき。他人と自分のはっきりとわかれていて自分はいつまでたってもずっと自分であり、他人もずっと他人だと思った。友人の本当の気持ちが知りたくても、それが絶対にできないのだとわかったことが実際のきっかけだったと思う。」

また、次の例のように、ある意味で日常の自明の事実となってしまった自己の孤立性が、あるきっかけから、再度、懐疑の対象となり、かけがえのない自分という存在の価値が喜びの感情を伴って肯定的に自覚される事例も見られた。自我体験の積極的な一面が表現された例であり、同時に、下位側面1から下位側面2への人生観上の発展を示唆する例でもあろう。

事例10/22歳/女/最印象項目11/高校;「(略)小さい頃から病弱で入院することが多く、孤独な気持ちを持つことが多かった。なぜ私は生きているのだろうか、どうして……という気持ちがよくあったが、高校生のとき、予備校でうけた倫理の授業などをきっかけに、なぜ、どうしてというギモンはあまり意味を感じなくなり、自分が今生きていて意志や希望をもつこと自体になによりも価値があると思うようになり、とても気持ちがよく泣けるうれしさを感じたことがある。」

3 「主我と客我の分離」

この下位側面に分類される事例は、初発体験が7例(全事例の7.4%)、最印象体験が8例(17.8%)であり、事例数は多くないが、しかし他の側面に分類された事例のなかにも明らかに「主我と客我の分離」の主題が認められる場合があり、この下位側面の重要性を軽視することはできない。次に典型的と思われる事例を挙げておく。

事例11/19歳/女/最印象項目09/中学;「ある日、鏡を見た時『私はこんな顔をしていたのか?』という疑問からはじまった。今でも本当の自分ではなく、肉体という殻の中に、別の本当の魂のようなものが入っているだけだ、今鏡にうつっている自分はその殻をうつしているにすぎないという感覚がある。」

事例12/18歳/男/初発項目09/小学校入学以前;「幼稚園時、鏡や写真に写っている自分がやけにウサнкуさく感じられてならなかった。自分の心はこの形としてみえる人間の中にあるわけで心と体がやけに遠く感じたこともある。」

これらの事例において特徴的な点は、「私」の存在が「心/体」「魂/身体」「見る自分/見られる自分」といった分離可能な2つの実体の結合として考えられたり感じられたりしていること、さらに前者の「心」「魂」などの実体に「本当の自分」としての優位性が与えられ、後者の実体には「肉体という殻」「魂を入れる器」といった二次的な地位が与えられていること、などである。2つの「私」の区別という特徴は、すでに述べた「自己の根拠への問い」の下位側面における最も基本的な特徴でもあった。ただし「自己の根拠への問い」のなかで問題になっていたのは「私」という1つの語のなかの2つの用法であり、この2つの用法をそれぞれ主部と述部に配置することで「なぜ私は私なのか」すなわち「なぜ〈この特定の人物〉が〈私である〉のか」という疑問が成立していた。これに対して「主我と客我の分離」の体験のなかでは、本来なら対象として指示することのできない「私である」という述部そのものが、まとまりをもった一個の対象として実体化されている。こうして「私である」を実体化することにより、「なぜ私は私なのか」の問いに「それは〈この身体〉のなかに〈心/魂/意識〉が入っているからである」という形の解決案が与えられることになる。前述の事例04や次の事例13は、ともに「自己の根拠への問い」に分類される例であるが、「自己の根拠への問い」への「答え」として、「主我・客我分離」が生じかけている現場とも見るができる（同じような移行事例は他に2例認められた）。

事例13/19歳/女/初発項目15/小学校以前；「ある朝、保育園に一番早く来てしまって、教室に1人である時に、すずめが止まっているのを見て、なぜ自分は人間として生まれてきたのだろう、と不思議に思ったのがきっかけです。その時、もし自分が人間以外のものに生まれてきたらどうだろう、とか、自分の体と心はもしかしたら離れることが可能なのではないかな、など、いろいろなことを考えてしまいました。」

この「主我と客我の分離」の体験のもう一つの特徴は「本当の私」とこれに対置される「体・身体・見られる自分」との間の距離の感覚であり、後者がよそよそしい存在として違和感をもって感じ取られることである。こうした特徴は特に「離人症」として知られる現象（たとえば、藤縄，1981）と一致する。また、次の例のように主我と客我の分離が視覚的な印象を伴って体験される事例もあった。

事例14/19歳/女/最印象項目10/小学校低学年；「小さい頃からずっと、自分の意識が、頭の少し上あたりに浮いている感覚がしていた。皆そういうものだと思っていたけれど、友人に聞いてみたら違うと言われた。自分の意識が、体の行動を見ている、そんな感じだった。（略）」

4「独我論的懷疑」

この下位側面には、初発体験の22例（23.2%）、最印象体験の6例（13.3%）が分類された。因子分析の結果では2項目のみが属し、寄与率も小さく、安定した因子とは見なし難いが、内容的に際立った特徴が認められるため1つの下位側面として独立させた。事例の特徴は、この「私」の孤立性・唯一性・例外性が強く意識され、さらにこうした「私」の性質と整合するように「私」を中心とした独特な世界観が形成されていることである。特に、一人きりであるという「私」の孤立性への自覚は「ルディ・デリウス事例」の「すべてが私から離れ去り、私は突然孤立したように感じた」という記述でも明白であり、2つの「私」の分裂の体験と共に、自我体験群の中核に位置する重要な特質である。次の事例は、「自己の根拠への問い」に分類される事例であるが、「自我」をめぐる問いが「他我」の存在をめぐる問いに引き継がれて「独我論的懷疑」へと発展していく過程が表現されており、2つの下位側面の論理の連続性を示すものといえる（同様の連続性が比較的明瞭に示されている例を、他に2例認めることができた）。

事例15/20歳/女/初発項目18/小学校中学年；「自分の意識はここにあって、友だちの意識はどこにあるんだろう、と考えたのがきっかけ。私だけがこんなことを考えているのかと思ったら、私だけが特別な存在（あまりいい意味ではなく否定的に）に感じられた。今でも疑問に思っている。」

すでに述べたように「自己の根拠への問い」は他の人称への変換が不可能なため、「こんなことを考えている」のは常に「私だけ」である、という思いへと結びつきやすい。この論理の独特の性質が、他者の心の中が分からないという経験的な事実と結びつくことで、次の事例のように、自分と自分以外の全ての人間との本質的な相違を強く意識させることになる。

事例16/19歳/女/初発項目12/小学校低学年；「授業を受けているときなど自分一人で物が考えられる時ふと思ったりした。周りの人達は人間なのか、今こうして考えることをしているのは自分一人だけだろうか。」

事例17/18歳/男/最印象項目12/中学；「自分が存在している時間が自分だけのもので他の人は活動してなくて、自分中心に世間が回っているのではないかと考えたことがある。」

下位側面3の「主我と客我の分離」の論理は、特定の人物としての「私」の存在を「体」「身体」「仮の姿」として実体化し、ある人物が「私である」という事実の述部を「心」「魂」「本当の自分」として実体化するというものであった。この論理は、任意の「身体」に宿る「魂」の互換性という形で、全ての人間、さらには生物、無生物を含めた全ての存在に「私である」ことの可能性を付

与するような信念体系を形成しうる。しかし、これと同じ論理（個々の存在=身体・仮の姿，私である=魂）を、ある存在が「私ではない」ことに着目して推し進めていくなれば、この「私」以外の全ての存在は「心」「魂」をもたない単なる「身体」「仮の姿」と見なされることになる。自分という存在を“殻のなかに「魂」が入り込んでいる”ように感じる論理と、他人の存在を“「魂」のない殻”のように感じる論理は、前提を共有しているのである。

次に挙げる事例には“本当に存在するのは自我とその意識だけで、自我以外のものは全て自我の所産にすぎないのではないか”という「独我論的懐疑」がはっきりと表現されている。

事例 18/19歳 / 男 / 初発項目 08 / 小学校低学年；「自分の視界に存在しないものは実際はなくて、自分が移動するたびに新しいものができると考えたことがある。例えば、今自分がこうして教室にいて、教室と外の景色（自分の視界）以外は存在しなくなるというふうに考えたことがある。」

この下位側面に属する事例には、次の例のように、ある超越的な存在者が「私」以外の世界の事物を操作し何らかの意図をもって「私」と対峙している、といった構図が見られる場合がある。

事例 19/20歳 / 女 / 初発項目 12 / 小学校入学以前—小学校低学年；「別にただなんとなく、自分以外のものは全て、自分の為に用意されたもので、それらが決まった動きをする中で、自分はどう生きていくのか誰かにためられているような気がした。」

これらの体験は、その著しく非常識な内容とあいまって、たいていの場合、成長と共に消失し、幼い頃の思い

出の一つとして処理されるようである。しかし、調査の結果には現れないとしても、秘かな信念として独我論が維持されることは当然考えられることである。もしこのような信念が他者の前で表明されるなら、事実上、病理的な妄想と区別できないであろう（藤縄，1981）。次の事例は、幼児期の自我体験と思春期の妄想との関連を窺わせるという意味で興味深い。

事例 20/20歳 / 男 / 初発項目 12 / 小学校低学年—小学校中学年—小学校高学年；「きっかけ、状況などは特になく、ただ学校、都市、国、世界の中の自分一人というものを見たとき、自分以外の人間はすべてグル（仲間というか、自分以外の人間たちはすべて顔見知り）と感じ、さらに自分は自分以外のすべての人に行動を監視されているのではないかと感じた。これは今もごくまれに感じることもある。」

自我体験の定義 付：下位側面のまとめと図解

以上の考察を踏まえ、自我体験群の全体像に極めて簡略な定義を与えんとするならば、「なぜ私は私なのか」という問いを中心に、それまでの自己の自明性が疑問視される体験、および、この困難な疑問に解決を与えようとする思索の試みであって、自己の独自性・唯一性の強い意識を伴うこともある」となるであろうか。この思索の試みからは、考えるのをやめて忘れてしまうという解決も含めて、個人としての人生観の確立、さらに、哲学、宗教、文学、科学、あるいは「妄想」の形をとった様々な解決が生まれてくることも考えられる。本調査で垣間見ることができたのは、哲学や宗教あるいは病理としての具体化ではない、普通の人々が発達過程の初期に経験した自我体験の純粋な様相である。

なお、便宜のため自我体験の4つの下位側面の特徴を

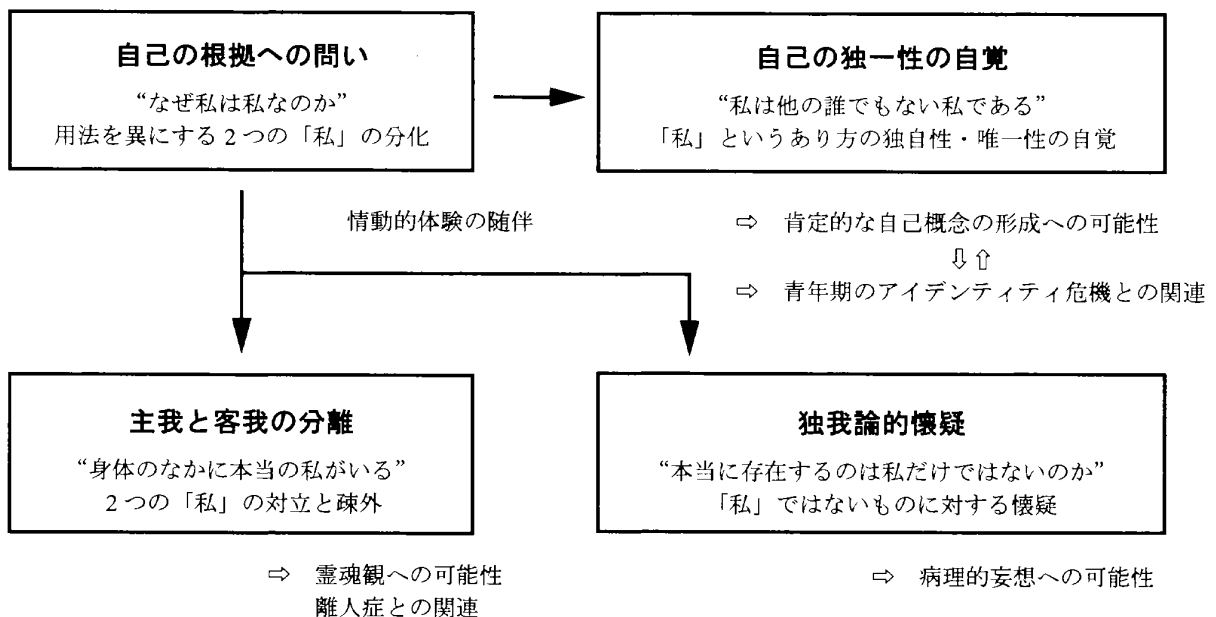


Figure 4 自我体験の下位側面の特徴と相互連関

Figure 4 に整理した。図中の矢印は考察の中で想定された思索の流れと世界観上の発展を、次項「結論と展望」での考察をも一部含めて示したもので、仮説としては思弁的段階を脱していない部分もあるが、今後の研究に方向付けを与えるものとして描き込んでおいた。

結論と展望 — 自己意識発達論の新たな地平へ

1. 本調査によって明らかにされた自我体験の実態の特徴に、まず、自我体験の普遍性がある。自我体験と判定された事例は、記述なしを含む全回答者の 27.5% にのぼる。自由記述なし回答者のなかにも自我体験の記憶をもつ者がいること、体験したが記憶に残っていない場合もあることを想定すれば、実際の体験率はさらに高まろう。天谷 (1997) の、中学生への面接によると体験率が百パーセントに近いという結果もこの想定を裏付ける。臨床事例報告の中や宗教的神秘的体験を扱った文献 (たとえば、岡田, 1992) には自我体験としても捉えられる例が散見され、西村 (1978) や本調査の例でも、病理や宗教心理との関連が言及されている。しかしながら本調査の結果は、Bühler, Sprangerらが、自我体験を病理や宗教心理としてではなく青年心理という普遍性の相の下に見ようとした方向性は基本的に正しく、病理・宗教との関連を明らかにするためにも、一般的な発達研究の一領域としてのアプローチが必要であることを示唆するものである。

2. しかしながら、自我体験は「青年」心理の枠組では捉えきれないこともまた、強く示唆されたのだった。想起された初発体験のピークが小学校低学年にあるという本調査の結果は、自我体験は青年期に固有どころか、10-12歳の前青年期に関連づけようとした高石 (1989) の説でもカバーしきれない。青年期に結びつけて論じるよりは、自我体験は何歳からどのような条件下で可能になるかという問題を立てるべきかもしれない。その点、自己の5つの種類について論じている Neisser (1993) が、私密的自己 (private self) は表象的心の理論が成立する4歳頃に形成されるとしているのは示唆的である。もっとも、回顧データのみに基づいて年齢を論じるには限界があることも認めなければならない。これは、発達初期の体験を回顧的に捉えるという Bühler 以来の自我体験研究が共有する限界であり、何らかの補完的な研究法の開発が望まれるところである。たとえば哲学者の Matthews (1994) は、3歳から7歳までの子どもは、それ以後の年齢においてよりもむしろ深く「哲学する」ことを、子どもとの日常的な対話を通して見いだしている。本調査の結果との年齢的な近似もさることながら、補完的な研究法のあり方を示唆するものとしても興味深い。

3. アイデンティティ論との関係について言えば、西村 (1978) によって自我体験研究との差異が主張され、

高石 (1989) も、自我同一性という概念は青年期後期から成人期への移行期の社会的役割取得の達成に重点を置いたものであって、前青年期から青年期初期への自我変容の問題を扱うには限界があるとする。本稿で明らかにされた自我体験の実態は、年齢的にも特徴の上からも、これらの説によって打ち出された方向性に添うものといえる。しかしながら両者は、互いに無関係に追求されてよい問題領域ではないであろう。両者の関係は今後の課題として残す他はないが、一つ手がかりを挙げるならば、May (1958) が、本稿での自我の独一性の自覚に当たる体験事例を、「われ、在り体験」、また存在論的感覚の出現と呼び、精神分析的な意味での自我発達の様相として取り扱われるべきではなく、むしろその前提条件なのだと言っていることがある。精神分析的自我発達論がアイデンティティ論の母胎であることを思えば、青年期以前の自我体験がどのような形をとったかが青年期のアイデンティティ危機のあり方に関係してくる可能性が、May の説から想定できるのである。

4. 最後に、本稿の「考察」からも窺われるように、自我体験は、Bühlerをはじめとするこれまでの研究者が予想したよりも、さらに深く、未知数な現象であって、自己意識発達論上に新たな地平を拓く可能性を秘めているのかもしれない。それは、自己意識とは何かという問題に新たな視座を提供すると共に、これまで病的もしくは宗教的体験とされてきた現象をはじめ、文学、哲学、思想史、科学史などに対しても、自己意識発達論の観点から接近しうる可能性を示唆する。自己意識発達過程の中でこの体験にふさわしい位置づけを与えるためにも、方法論的工夫を重ねつつ、実証的知見をさらに積み上げ、理論的考察を練り上げていくことが必要であろう。

文 献

- 天谷祐子. (1996). 「自分」というものへの気づき. 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学論集, 26, 32-36.
- 天谷祐子. (1997). 「自分」というものへの気づきはいつ頃なのか?. 日本発達心理学会第8回大会発表論文集, 138.
- Bühler, Ch. (1969). 青年の精神生活 (原田 茂, 訳). 東京: 協同出版. (Bühler, Ch. (1926). *Das Seelenleben der Jugendlichen*. Stuttgart - Hohenheim: Fisher Verlag.)
- Erikson, E. H. (1973). 自我同一性 (小此木啓吾, 訳). 東京: 誠信書房. (Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle: Selected papers/life cycle*. New York: International Universities Press.)
- Freud, S. (1970). 自我とエス (井村恒郎, 訳). フロイド選集4: 自我論. 東京: 日本教文社. (原著刊行年次, 1923.)

- 藤縄 昭. (1981). 非定型精神病：症状：一般論. 懸田 克躬・大熊輝雄・島藺安雄・高橋 良・保崎秀夫 (編), *現代精神医学大系：第12巻 境界例・非定型精神病* (pp.185-203). 東京：中山書店.
- James, W. (1895/1981). *The principles of psychology*. Cambridge: Harvard University Press.
- 前田陽一 (編). (1966). *世界の名著：24 パスカル*. 東京：中央公論社.
- 松尾 正・宮本初音. (1995). 分裂病者現象はいかにしてその存在論的真理を暴露しうるのか. *福岡行動医誌*, 3 (1), 28-53.
- Matthews, G. B. (1997). *哲学と子ども*. (倉光 修・梨木香歩, 訳). 東京：新曜社. (Matthews, G. B. (1994). *The philosophy of childhood*. Cambridge: Harvard University Press.)
- May, R. (1977). 実存的サイコセラピーの貢献. May, R., Angel, E., & Ellenberger, H. F. (編), (伊東 博・浅野 満・古屋健二, 訳) *実存* (pp.54-150). 東京：岩崎学術出版社. (May, R., Angel, E., & Ellenberger, H. F. (Eds.). (1958). *Existence*. New York: Basic Books.)
- Mead, G. H. (1973). *精神・自我・社会*. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野 収, 訳). 東京：青木書店. (Mead, G. H. (1934). *Mind, self and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: University of Chicago Press.)
- 永井 均. (1986). *〈私〉のメタフィジックス*. 東京：勁草書房.
- Nagel, T. (1986). *The view from nowhere*. New York: Oxford University Press.
- Neisser, U. (1993). The self perceived. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge* (pp.3-21). Cambridge: Cambridge University Press.
- 西村洲衛男. (1978). 思春期の心理：自我体験の考察. 中井久夫・山中康裕 (編), *思春期の精神病理と治療* (pp.255-285). 東京：岩崎学術出版社.
- 野田又夫 (編). (1967). *世界の名著：27 デカルト*. 東京：中央公論社.
- 岡田康伸. (1992). 神秘体験. 氏原 寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 (編), *心理臨床大事典* (pp.1076-1077). 東京：培風館.
- Rümke, H. C. (1958). Die klinische Differenzierung innerhalb der Gruppe der Schizophrenien. *Nervenarzt*, 29, 49-53.
- 佐保田鶴治. (1976). *ウパニシャッド*. 東京：平河出版.
- Spranger, E. (1973). *青年の心理* (土井竹治, 訳). 東京：五月書房. (Spranger, E. (1932). *Psychologie des Jugendalters*. Heidelberg: Quelle & Meyer Verlag.)
- Subbotsky, E. V. (1996). *The child as a cartesian thinker: Children's reasonings about metaphysical aspects of reality*. UK: Psychology Press.
- 高石恭子. (1989). 初期及び中期青年期の女子における自我体験の様相. *京都大学学生懇話室紀要*, 19, 29-41.
- 渡辺恒夫. (1992). 自我の発見とは何か：自我体験の調査と考察. *東邦大学教養紀要*, 24, 25-50.
- 渡辺恒夫. (1995 a). 再論 自我の発見とは何か：その意義と方法論的問題. *東邦大学教養紀要*, 27, 63-85.
- 渡辺恒夫. (1995 b). 自我の発見とはいつごろのことか. *日本教育心理学会第37回総会発表論文集*, 477.

付記

調査の実施に当たって加藤義信愛知淑徳大学教授と中村雅彦愛媛大学助教授に、結果の整理に当たって東邦大学学生(当時)見市直子氏に、それぞれご協力いただいたことに謝意を表します。

Watanabe, Tsuneo (Faculty of Science, Toho University) & Komatsu, Eiichi (Doctoral Research Course in Letter, Waseda University). *Ego-Experience: A New Perspective on the Development of Self-Consciousness*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1999, Vol. 10, No. 1, 11-22.

The present study illustrated the unknown features of Ego-experience (EE). In this study, EE was provisionally defined as the experience of incongruity and uncertainty over self-evident knowledge of the self. Undergraduate students (243 females and 102 males) completed a questionnaire about EE by responding "yes" or "no" to 19 statements. They then chose their first and most impressive experience items and described their experiences with free responses. Factor analysis and an evaluation of the first and most impressive experience item revealed 4 subspects of EE: "question about the basis of the self," "awareness of original uniqueness of the self," "separation of I and me," and "solipsistic skepticism." A content analysis of the free descriptions suggested the inter-relations between the 4 factors. Finally, this study clarified that EE first occurred in childhood rather than in their early adolescence.

【Key Words】 Ego-experience, Self, Questionnaire method, Undergraduates, Childhood